



「新しい気候の科学」

Thomas Levenson 著,

原田 朗 訳

(原題) ICE TIME Climate, Science,
and Life on Earth

晶文社, 1995年 8月, A 5版, 278頁,
3200円

今、「気候」を巡る事情が慌ただしい。1995年6月の世界気象会議で「気候の課題 (The Climate Agenda)」が採択された。これには①気候科学、気候予報に関する研究開発、②持続可能な発展のための気候サービス、③気候影響評価に関する研究と気候に対する脆弱性の解消への対応策、④気候系監視を目的とした観測の4つの柱がある。

世界気象機関 (WMO) の気候問題への取り組みは1979年の第1回世界気候会議で「大気中の二酸化炭素の増加に伴う地球温暖化の懸念」が表明されたことに遡ることができる。世界気候計画 (WCP) の下で気候変動の実態把握のための観測の強化、変動のメカニズムの研究の推進、気候変動に伴う社会経済活動への影響評価等が推進されてきた。

気候の問題は、その後政治的課題としてその重要性が増し、1990年の第2回世界気候会議では、WCPの4つの柱を見直し、新たに4つの柱を立てた。さらに、地球温暖化に関する IPCC (気候変動に関する政府間パネル) の科学的評価に基づいて FCCC (気候変動に関する枠組み条約) が提唱され、各国政府は気候に関連した事項について政治的、法的な付託を受けるようになってきた。各国政府が限られた予算でこれらの付託に応えていくために、単に WMO といった枠を超える新たな国際的枠組みの必要性が認識され、新たな枠組みとして Climate Agenda が提唱された。これに関連する国際機関は、WMO の他に UNEP (国連環境計画)、UNESCO (国連教育科学文化機関)、IOC (政府間海洋学委員会)、FAO (国連食糧農業機関) および ICSU (国際学術連合会議) があり、それぞれが独自に承認手続きを進めている。WMO の他に FAO と UNEP が既に承認済みである。今後、これら6つの国際組織の舵取りのために新たに WCP 調整委員会 (CCWCP) が設立されることになっている。

気象と同様、気候問題に関心を持つ人の多くは、自然現象に強い興味を示すが、その社会・経済活動への

影響まではなかなか食指を動かさない。しかし、かけがえないこの地球の将来の姿を人類の活動によって変えてしまうまでに勢いを持ってきたことは間違いない所であり、我々には、自然を見つけて得た知識を社会に還元する責任があることに改めて思いを致す必要がある。

そこで気候の問題の因ってきたところを理解し、解決への努力を始めなければならない。実は、気候は人類の生活の外にあるのではなく、地球上に生物活動が始まったが故に、今日の大気組成があり、気候分布が確立し、またそれらが変化していくといったことが、本書の冒頭で語られる。

本書は、今日の映像全盛の時代風潮に真っ向から逆らい、図表を一切使わずに、地球の創世期の大気の始まりから、その後の大気組成の変化に果たす生物の役割、そしてその生物 (人間) の活動による変質の継続を物語風に記述していく。著者は、荒井郁之助の伝記を著した原田氏 (元気象研究所長) の淡々とした文章を通じて、我々に語り続ける。

評者としては、図表をほんの僅かでいいから使った方がはるかに理解し易いのにと、もどかしい想いで読み始めたが、読み終って見ると、例えば9章の気候モデルの部分で語ったランドサットによる森林破壊の場面を初めとする一連の衛星写真による地球の傷跡の場面を写真を使わずに記述した文章等は、写真で見ると以上に鮮明に記憶に残っているから不思議である。

表紙のカバーをはずすと真っ白の装丁ハードカバーが現れる。これからの気候問題にどんな解決法があるのか? 評者にも分からない。白いキャンバスを多くの有能な読者諸氏に・・・と勝手に想像した。

以下に目次を示し、紹介の責任を果たそう。

I 氷に覆われて: 1 気候の科学の誕生, 2 地球史の解説, 3 氷の到来, 4 人類と気候, 5 エルニーニョと異常気象, 6 暴風。

II 計算機のなかの地球: 7 戦争と天気予報, 8 計算機の日, 9 気候モデル。

III 気候が変わるとき: 10 酸性の雨, 11 ひろがる砂漠, 12 暖かい未知の大地, 13 核の冬。

著者はロイター通信、「タイム」誌の科学担当記者等を歴任した新進の科学ジャーナリストで、本書は気候問題を物語風に扱い、読者に深い考察を求めた書と言えよう。

(気象庁予報部長期予報課 安富 裕二)